北国の町リポン と ルイス・キャロル

笠 井 勝 子

はじめに

ルイス・キャロルは「北国の子ども[1]」ともいわれる。生まれがチェシャ州ダーズベリで，一家はその後さらに北のヨークシャ州クロフトへ移り，彼の帰省地はいつも家族のいるところ，父の生前は北の地であったから，まさに北国の出身であった。1852年以後はクリスマス休暇になると田舎へ戻って新年にはリポンへ移ることが習わしとなった。ここでは，リポンとキャロルの関わりについて，その糸口となったキャロルの父ドジスンとリポン司教ロングリーの交友について，また当時のリポン司教館に納められた父ドジスンを顕彰する記念のステンドグラスにまつわる逸話を紹介，そして，リポンにおけるキャロルの創作詩，小品を翻訳し，解説をおこなう。

1．リポン

リポンは西ヨークシャー州にあって，ヨークからさらに西北西に23マイル，ロンドンからは北北西に212マイルの位置にある。「川の土手にある」という意味の地名はラテン語のRipa[2]に由来する。リポンはユアル(Ure)川とスケル (Skell) 川の二つの川に挟まれている。古くは，スコットランドのメルローズから来た修道者イータ (Eata) が7世紀の中頃，この地に修道院を建てたのがリポンの町の始まりとされる。町は，聖ペテロおよびサクソン時代のヨークの司教ウィルフリッドをその守護聖人とし，リポン大聖堂には英国内でも数少ないアングロ・サクソン時代の地下聖

堂がそのままの形で今に残っている。町の紋章[3]は，角笛(bugleあるいはhornという）に拍車を組み合わせたデザインをしている。拍車は古来から地元の製品であった。角笛にまつわる伝統行事は今でも守られて，毎晩9時になると町の中心にあるタウンホール前の広場マーケットプレイスで，角笛吹きが時を知らせる。彼は古くからリポンの角笛吹き[4](Ripon Hown Blower）として知られて魔よけの飾りにもなっている。

2．発端

ルイス・キャロルとリポンの関わりは，キャロルの父チャールズ・ドジスン（Charles Dodgson1800-1868）とトマス・ロングリー（Thomas Longley1796-1868）の親交に始まる。チャールズ・トマス・ロングリーは，ラグビー校，そしてオクスフォードのクライスト・チャーチに学び，その後は，

1829-36　ハロー校校長（Headmaster of Harrow）
1836-56　リポンの司教（Bishop of Ripon）
1856-60　ダラムの司教（Bishop of Durham）
1860-62　ヨーク大司教（Archbishop of York）
1862-68　カンタベリー大司教（Archbishop of Canterbury）

と，1836年のリポン司教就任を皮切りに教会内の出世街道を順調に進んだ。なかでもリポン司教としての20年はもっとも長く，続いてダラム司教として4年，ヨーク大司教として2年の後，最高位のカンタベリ大司教となっている。その大司教も今ではノンセンスの作者キャロルに比べれば，世間に知る人は少ない。

ロングリーは1836年，リポン司教に任命されるや，ドジスンに試問司祭を依頼した。その役目は，牧師志願者に対する霊的指導者，相談役を務めることであった。キャロルはそのとき4才で，ドジスン一家はチェシャ州ダーズベリにある田舎の牧師館で暮らしていた。キャロルが11才

になった1843年には，ロングリーの働きかけで父ドジスンは，ヨークシャのクロフトの教会に移って，1868年に急死するまでの26年間，在任した。父のチャールズ・ドジスンは，ロングリーと同様にラグビー校とオクスフォードを経て，

ダーズベリ教区牧師　(Pastor of Daresbury)　1827-43
クロフトの教区牧師　(Rector of Croft)　1843-68
リポン司教の試問司祭(Examining Chaplain)　1852-68
リポン大聖堂参事　(Canon of Ripon)　1852-68
リッチモンド大監督(Archdeacon of Richmond)　1854-68

と，教区牧師の他に複数の役目を兼務していた。

キャロルが20才になった1852年に，父ドジスンはクロフトの牧師のままで，ヨークシャの北西部にあるリポンの聖堂付き参事の地位を得て，以後は亡くなるまで16年の間，毎年１月１日から13週間をリポンで過ごすことになった。この期間に家族のものも父親と共にクロフトを離れてリポンへ移動した。母親のフランシス・ジェインは1851年に亡くなっており，彼女はリポンのことを知らない。オクスフォードのクライスト・チャーチで生活していたキャロルも冬休みの間のこの時期と，また復活祭が早い年にはイースターの休暇にも，家族と共にリポンで過ごした。父と母方の伯母ルーシーと11人きょうだいの大家族が住むには，宿舎のリポン聖堂参事館では部屋に余裕がなく，さらに男子の使用人を同行させたときには息子たちは，みな他所に泊まった。そうしたときにキャロルは町の中心部マーケット・プレイスにあるユニコーン・ホテルに宿泊したことがある。このホテルとキャロルの作品との関連については，後に述べたい。

3．父ドジスンの顕彰

1852年に，キャロルの父ドジスンがおこなった「典礼主義の礼拝」と

題する説教に対して，内容をまったく理解しない人々からはローマカトリック偏向との疑いを掛けられ，ドジスンは教会の一部から攻撃を受けたことがあった。試問司祭の彼に世話になった185人の牧師はそれを知って，こぞって彼への支持を表明し，ドジスンの働きを顕彰するドジスン・ウィンドーをリポン司教館の礼拝堂に設置した。

キャロルの父ドジスンは，大学の先輩，チャールズ・ロングリーがリポン大聖堂の司教に就任して以来，ロングリーがダラムの司教となってリポンを去って後も，リポンの大聖堂の試問司祭の任にあった。2000年8月，英国ルイス・キャロル協会はリポンでの研究大会を記念して，アン・アモーがそれまでは未公開であった資料を整理し小冊子の形で発表した[5]。これによって周囲の人々が寄せたドジスンへのサポート，ドジスンの人柄について一層明かなものとなった。その冊子から紹介したい[6]。

> これは1852年秋のことで，それまでの過去15年間にリポン司教によって叙階を受けた185人の聖職者がリポン司教館の個人的なチャペルに設置する記念のステンドグラスを入れるために，費用を出し合っている。185人もの聖職者がこのようなことを一致しておこなうことはかなり異例のことである。即ちそれは，当該の試問チャプレンから受けた恩恵に対する強い感謝の意を表明したものであり，これを受ける人の人徳，学識，知恵とキリスト教信仰を物語っていると考えられる。またさらに，ドジスンを強く支持している司教ロングリーに対する崇敬の表明ということができよう。

ドジスンがおこなった問題の説教というのは，1852年2月2日（聖燭節）にリーズの聖トマス教会の献堂式でおこなった説教[7]のことである。この説教が原因で，彼は一部の人々の憤激を買った。説教は『典礼主義の礼拝』と題するもので，聖書から創世記第4章4，5節[8]を選んでいる。リポンの低教会派[9]のグッディ（Dean Goode）博士は，ドジスンの説教についてローマカトリックへの傾きがあると咎めて，司教ロングリーに

宛てて批判の文書を送った。ドジスンはそれに応えて，彼がおこなった説教とそれにまつわる書簡を冊子に印刷した[10]。

グッディ博士の非難に応えて，ドジスンはさらに『リポン司教猊下への手紙』と題する小冊子を出版し，その中で，自分の見解をさらに語り，ロングリー司教が言明した「彼（ドジスン氏）は，我々英国における宗教改革の基礎を築いた人々と同じ思想であり，ローマカトリック教徒に転向するような人では全くない」ということばを，ロングリーの了解を得て引用している。ロングリーの弁護によって，グディ自身の誤解はすでに解けていたことは冊子にあきらかである[11]。したがって，冊子はグディの批判を読んだ人々に向けたもので，確実に自分の意図を伝えることが目的であった。

ドジスン・ウィンドーは，同年秋に設置され，献辞[12]が添えられた。

4．『カーペットの騎士』

1855年にキャロルはリポンで『カーペットの騎士』という短い詩を書き，翌年，雑誌『トレイン』に載った。アーサー・フロストに描かせた挿絵[13]でみると，室内の干し物掛けに跨がった「騎士」[14]の姿は，「鏡の国」の中で決闘の準備を調えたトィードルディとダムの兄弟の出で立ち[15]にも似て，石炭入れの兜を頭に冠っている。

キャロルが詩にうたった騎士で挿絵になっているものは4枚ある[16]。挿絵の製作年の順に，左上の挿絵の騎士はキャロル自身の手による。左下は，『鏡の国のアリス』の白の騎士，右下は，『鏡の国のアリス』の白の騎士が歌う詩の中に出てくる年寄りの騎士，共にジョン・テニエルによる。右上は，リポンで作詩された『カーペットの騎士』にアーサー・フロストが挿絵を描いたもの。

ウェイクリング (Edward Wakeling) 編の日記第2巻によれば，1856年2月8日には，イェイツがキャロルの詩「孤独」と「カーペットの騎

士」を『トレイン』に使いたいと言ってきているという次の記述がある。Heard from Mr. Yates. He is going to use the verses on "Solitude," and the "Carpette Knyghte," he wishes me to alter the signature B. B. and proposed that I should adopt some nom de plume ;…[17] また，第1巻の日記では，1855年1月11日に，wrote "the Carpet-kngiht" in the Art-Repository. 技巧を凝らして[18]，「カーペットの騎士」を書いた，とある。この技巧的な部分を読みやすく直してみる。左がキャロル独自の綴り字による原文，右は対応する英文の試訳。下に日本語の訳を付す。

YE CARPETTE KNYGHTE

I have a horse—a ryghte goode horse	I have a horse—a right good horse
Ne doe I envye those	Never do I envy those
Who scoure ye playne yn headye course	Who scour the plain in headstrong race
Tyll soddayne on theyre nose	Until suddenly on their nose
They lyghte wyth unexpected force	They light with unexpected force
Yt ys—a horse of clothes.	It is—a clothes horse.
I have a saddel—'Say' st thou soe?	I have a saddle—'Do you say so?'
Wyth styrrupped, Knyghte, to boote?'	With stirrup, Knight, to boot?
I sayde not that—I answere "Noe"	I did not say that—I answer 'No'
Yt lacketh such, I woote;	It lacks such, I warrant;
Yt ys a mutton—saddle, loe!	It is a mutton—saddle, lo!
Parte of ye fleecye brute.	Part of the fleecy brute.
I have a bytte—a ryghte good bytte	I have a bit—a right good bit
As shall bee seene yn tyme.	As shall be seen in time.
Ye jawe of horse yt wytt not fytte;	The jaw of horse it will not fit.

Yts use ys more sublyme.	Its use is more sublime.
Fayre Syr, how deemest thou of yt?	Fair Sir, how do you think of it?
Yt ys−thys bytte of rhyme.	It is−this bit of rhyme.

カーペットの騎士[19]　　(試訳)

われに馬あり ── 由緒正しい馬
われ，羨むことは断じてせず
一目散にコースを駆けるやつらなんぞ
地面に鼻をつけ
やつらは思い掛けぬ力でとまる
わが馬は ── 干し物掛け

われに鞍あり ── 「汝，そう言うか？」
騎士よ，乗馬靴をかける，鐙のあるやつか？
そうは言っておらん ── 「否」と返す
そのようなものはない，断じて
そはマトンの鞍なり，見よ！
ふさふさの獣の一部なり

我にはみあり ── 由緒正しいはみ
やがてみなの目にとまろう
馬の顎には懸らぬが，
それよりもっと崇高な用途あり
立派なご仁よ，そをいかに思われるや
そは ── この詩のことのはみ

リポンで書かれたこの「カーペットの騎士」は，『鏡の国のアリス』のトィードゥル・ディとダム兄弟に先立つこと16年，学部生のキャロルが

23才のときの作である。

5．『スコットランド伝説』

5．1．リポンで書いた短編

キャロルの父を，それによってキャロルを，リポンに結びつけたトマス・ロングリーは，1856年にダラムの司教となりリポンを去って，ビショップ・オークランドにある司教館に住んだ。ビショップ・オークランドは，その辺り一帯に樫の木が多かったこと，また，歴代のビショップがその居城を置いたところからその地名は由来している。ロングリーが移り住んだ翌年の夏に，キャロルは父と弟二人をクロフトに残すと，他の家族を連れて，日帰りでビショップ・オークランドの司教館を訪ねていった。そのときロングリーは不在で，夫人と子どもたちがオークランド・カースルと呼ばれる館の内外を案内してくれた。ロングリーの子どものうち長男のヘンリーはキャロルの一つ年下で，クライスト・チャーチでは友人どうしだった。その彼はこの時は留守だった。ヘンリーの弟アーサーと4人の姉妹がいて，屋敷の内外を案内してくれた。お天気は実に気持ちがよかった[20]。キャロルはロングリー家の人たちのために，飼い犬の「ジョック」の墓碑銘を作る約束をした。それから，館と地下貯蔵室にまつわる伝説を書くことも約束した。

翌日の1857年8月13日には，犬のための墓碑銘ができた。それをロングリーの一番末の娘キャロラインに宛ててキャロルは妹のルイーザに郵送させている。

城の居住者らは，地下室の一隅を，居住部分からは遠いためと冷え冷えとしているために「スコットランド」と呼び習わしていた。キャロルはロングリーの末の娘のキャロライン(Caroline)とロザマンド(Rosamond Esther Hurriet)に地下室にまつわる物語を書くことを約束して，『スコットランド伝説』という短い話を，翌年1月16日に書き上げた。

ロングリーの娘の気晴らしのために書いた『スコットランド伝説』は，女性の幽霊に出会った男の話で，幽霊の衣服のことや彼女の全身像を写真に撮り損なうことなどをことば遊びを交えて思いつくままに作った短編で，発表する気はなかったようだ。印刷になったのは，彼の死後で，甥のスチュアート・コリングウッドが著した『ルイス・キャロルの風景』[21]に載ったのが最初である。

5．2．　エドガー・カスウェリス，「川」に遊ぶ

『英国地誌辞典』[22]によれば，ビショップ・オークランドを流れる二本の川の名称[23]は，一つがゴーンレス(Gaunless)，もう一つはウェア(Wear)という。『スコットランド伝説』のなかに幽霊が現れる場面で「ガウンレス (Gownless)」という囁きと，衣服を身に着けるWearに掛けたくだりがあり，いづれもビショップ・オークランドの二つの川に由来していたのである。また，『伝説』の終わりに名前が出るベック司教[24]と小川の水については，その昔，司教館であるオークランド・カースルを建てた司教がアンソニー・ベック[25] (Anthony Beck) という人であったこと，またベックはドイツ語で小川の意味を持つことを考え併せると，『スコットランド伝説』のなかでキャロルは，「川」に掛けてことば遊びをしていたらしいことが窺える。

この『伝説』の著者は，エドガー・カスウェリス (Edgar Cuthwellis) という人物で，それは筆名「ルイス・キャロル」が誕生するより前に，自分の名前チャールズ・ラトウィッジCharles Lutwidgeをもとにして作り出したアナグラムである。ただ，それはいかにも新聞記者のような筆名であると，『トレイン』の編集者エドマンド・イェイツはこれを退けた。『スコットランド伝説』はキャロルがエドガー・カスウェリスの名前によって書いた唯一の話ということになっている。

物語は，つぎのようである。

5．3．『スコットランド伝説』

『スコットランド伝説』は，ここに全文を翻訳し（5.3.1.），物語のなかの遊びを挙げよう（5.3.2.）。

5．3．1．翻訳『スコットランド伝説』

これはオークランド城の人呼んでスコットランドという部屋で，下男のマシュー・ディクスンが経験した話，さる貴婦人の話，さらにそのあたりでは明かなゴーンレスというあるものについて，また現在では誰ひとり（恐怖のせいらしいが）そこでは寝ようとはしないのだが，どうしてそうなったのかという話，こうしたことはみなベック司教の時代に起きたことで，楽しい記憶にあることなど真実を，かつ恐ろしいことをありのままに，1325年2月のある火曜日とその他の日に，私が書いたものである。

エドガー・カスウェリス

前述のマシュー・ディクスンなるものは，食器をあの場所へ取りに行った。そのディクスンを城の主人は誉めて，ひと晩彼をもてなしてやるように命じられた（事実は，このディクスンはたいへんな食欲で御馳走をたっぷりと平らげた)。さて彼は，現在スコットランドと人の呼んでいる建物の，とある部屋で眠りについた。真夜中に，彼は大声を上げてそこから飛び出してきた。みなのものは目を覚まし大急ぎに走って，そこの廊下を行き，叫び続けるディクスンのところへ駆け付けた。ディクスンはたちまち気を失った。

みんなは，彼を主人の応接間に運び，難儀の末に椅子の上に下ろした。ディクスンは椅子から3の数倍回も床の上にすべり落ち，みんなはいたく感心をした。

いろいろ強いアルコールでやっとのことで落ち着いてきて（とりわけジンが効いた)，ディクスンは暫くすると悲しい声で次のことを物語った。その話には直ちに9人の勤勉かつ頑強な農夫が証人となった。9人は直

ぐ傍に住んでいる。彼らの証言をその順番に従って書き記しておこう。

下男マシュー・ディクスンの証言。私の頭は正常であること。40才を過ぎており，この城の中で私が見たもの聞いたもの，いたく恐怖に苛まれているスコットランドの幻影について，そして幽霊について，その二つのあらゆることについて，そこに含まれることについて，またある不思議な貴婦人について，また彼女が語ったもの悲しいことがらについて，別の悲しい節回しと歌をつけて，それはかの貴婦人と他の幽霊が作り出したものである，また寒さのこと，(あまりの恐怖のせいで)私の骨ががたがたと震えたこと，他にも知れば実に愉快なことについて，特にその後，突然撮ることになった写真について，また（まさに幽霊が予告したとうりに）そこで降り掛かったことを，そしてことばよりももっと恐ろしいことを一緒にして，暗闇について，そして人間がチメラと呼んでいるものについての証言をしよう。

下男マシュー・ディクスンはこう語る。「彼は一晩，緑の鵞鳥[26]を十分に食し，それから（と言いながら，城の主人を見てそちらへ帽子を脱いでお辞儀をしようとした。しかし彼はそれをしそこなった。何故となれば，彼の頭には帽子がのっていなかったから。)それから床に入り，鮮烈で恐ろしい夢に長いあいだ苛まれた。その夢のなかで，若い貴婦人がガウンを着ているのをみた（実はガウンには見えなかったのだが）ある種の包むものを纏っていた。きっと，それは包む者というのがよいが，包む奴なのだ。」(これを聞いていた館の女中は，貴婦人というものはそのようなものは絶対に着たりはしない，ときっぱり言いきった。そこでディクスンは「訂正のとうり受けて立ちます」と潔く言うと，そのまま椅子から腰を上げたが，立つことが彼にはできなかった[27]。

証言は続く。「その貴婦人は大きな松明をゆらゆらと振った。それからか細い声が，「ガウンレス！ガウンレス！」というのが聞こえた。貴婦人は床の中央に立っていた，すると，大きな変化が彼女に起きた。その顔

付きがどんどんと年寄りになり，髪はどんどん白くなった。そのあいだ中，彼女は非常に悲しい声で，「現在貴婦人たちはガウンが無いガウンレスだが，将来は，ガウンがないということにはさせません」。そのことばで，彼女を包むものはゆっくりと溶けて，絹のガウンに変わってゆき，その上にも下にも襞が入っているのに，ガウン[28]それ自体には少しも襞がついてはいなかった。この下男の話ぶりに，城の主人はじれったくなり，彼の頭を叩くと，直ぐに話をやり終えるように命じた。

証言は続いた。「今話したガウンは，それからさまざまに変わってゆき，こちらでループを作り，あっちでループを作りして，見ているとまさに火の色をしたペチコートになり，よく見ると真紅の色にもなり，その嘆かわしい血に乾いた光景をみて，彼は呻いて泣き出した。それから仕舞いにそのシャツは，人間の力を圧して巨大に膨れあがり，張り骨，車輪，バルーン，その他類似のものによって，上の方へ持ち上げられていった。かくして部屋いっぱいに広がって，彼をベッドへぺちゃんこに押しつけ，ついに彼女は出てゆくのだが，その途中で彼の髪の毛を焦がして行った。

「彼はそんな夢から覚めると，さっと足音が走るのと光とを見た（女中がここに割り込んで，確かに葦[29]の光がその部屋では燃えていた，と大きな声で言ったのだった。しかし，城の主人は，黙っておれという意味で，女中にやめよ，と命令した。

証言は続いた，「そのことでひどく怯えたために，彼の骨は(彼が言ったところでは）すっかりごなごなになり，彼はベッドから飛び出ようと試み，かくしてベッドを立ち退いた。だが，彼はしばらくはそこに留まった（これは心臓が強いためかと思われようが，いや，むしろ身体の方の理由であった。)するとこの時，彼女は古い歌の一節を口ずさんだ。それはちょうどウィル・シェイクスピア先生が作られたような。」ここで主人は，何の歌か，それを歌ってみよ，と命じた。彼は二つだけなら知っていると言った。一つは，「それはトラファルガー湾においてであった，

フランス人が倒れているのを見た」というもので，もう一つは，「ビスケイ湾にその日一日中，我らはみんな倒れていた ------- おお」というのであった。この歌を彼は大きな声で調子外れに歌った。それを見て，ある者は，薄笑いした。

証言は続く，「彼はおそらくその歌を伴奏が付けば，歌うことができましょう。だが，伴奏なしでは，彼はどうしても歌うことはしないのです。」それを聞いて，みんなは彼を学習室へ連れていった。そこには，40の音色を持つピアノ40奏（ピアノ・フォーティ）という楽器（「芸術の勝利なり」）があった。その楽器を我が主人の姪である二人の若き貴婦人でそこにお住いになっておられる方（みんなは学習をしている，と思っているが，しかし私には少なからず怠けていることがわかる），そのおふたりが彼の歌に合わせて，ある音楽をどしんどしんと演奏された。彼女らはこれまで誰ひとりとして聞いたことがない節で，できる限り上手く弾いたのであった。

「ロレンゾはハイヒントンに住んでいた
　（そのコートはディミテーでできていた）
　そこにちょうどではないけれど一番小さい道
　それですぐ近くのところに
　彼は私を訪ねてきた ― 彼はお茶の時までいた ―
　だのに彼は一言もなにも言わなかった。
　私が，「パンはドライがよいのですか？」と言ってみたら，
　やっと，彼は「バッターを付けて」とこう答えた。
　（そこに居たものはみな，さかんに合唱）
　「ぬうっと腑抜けの
　　抜け頭。
　　わたしゃ，腑抜けが大嫌い，ほんと。」

証言は続く，「すると，彼女は彼が最初に夢でみたのと同じゆるやかな

包むものを纏って，彼に現れた。そしてしっかりと，はっきりと，話をした。」

貴婦人の物語

「ある露の降りた秋の宵のこと，オークランド城のすぐ近くを一人の若い貴婦人がきびきびとした様子で歩いていました。彼女は目に見苦しくなく，かなり美しいと言ってもよいほどで，ただたまたまそれが真実ではなかったことを別にしておきましょう。

「その若き女性とは，おお哀れな男よ，私でした。」(このことばに，私は尋ねた，如何なる物差しで私を哀れとはいうのかと。すると，彼女は答えて言った，それは問題ではありませんと。)

「私自身，その当時は，自分自身の優れた美しさを超える姿の高さで自分を飾ることに意を用いていました。そこで大いに望んだことは，誰か画家が私の絵を描いてくれることでした。けれども，いつも彼らはあまりに高いのです。つまり腕前の高いことではなく，値段のことなのですが。」(そこで私はきわめて鄭重に質問をした。その当時の画家は幾らで仕事をしたのかと。だが，彼女はお高くとまってこう言った，お金の問題は卑しいこと。彼女の預かりしらぬこと，気にもかけないことです，と。)

「さて，ある画家，高きロレンゾなるものがやってきました。彼は人間がチメラと称する驚嘆の器械を持ってきました。(それは途方もなく素敵な，まことにほんとうに信じがたいものでした。)それを使用してたくさん写真を撮りました。一枚を，時のひと打ちする間に，つまり，人間が「ロビンの息子のジョンや」とことばを発する間に撮ってしまうのでした。」(私は彼女が言う，「時のひと打ち」とは何かと問うてみたが，彼女は顔を顰めて答えはなかった。

「彼こそは，私の写真を撮ることを引き受けた人。その時に，私が求

めた大事な一事は，全身像にするように，ということだったのです。それ以外の方法では，私の高さをほんとうのところ証明することにはならないからです。にも拘らず，彼はたくさん写真を撮るには撮ったのですが，この一事の点では，悉く失敗でした。頭の入った写真には足が入らず，足を撮った写真の方には頭は取り残しになりました。前者の写真は私の嘆くところとなり，後者の写真は他の人の笑い草になりました。

「これらのことに私が苛立つのは至極もっともなことで，最初は彼に対して友好的にしていたのですが（真実のところ，彼は愚かだったのです）ここで，彼の耳を大きにぶったのです。すると，彼の頭から毛髪の房がむしり取れてしまい，それを見て，彼は大声で，私が彼の人生に重荷を負わせたと叫んだのです。そのことを私はひどく喜びこそすれ，疑うつもりはまるでありません。

最後に彼はやっと，次の提案を出しました。即ち，写真は製作されるべきこと，可笑しくない程度までたっぷりスカートを入れて見せるようにして，写真の下に次のように説明を付けること，「品目，２ヤード半，同じく，そしてそれから足」。けれどもこのことは少しも私を満足させはしませんでした。そこで私は彼を地下の貯蔵室に閉じ込めて，彼はそこに３週間押し込められて，日毎に痩せ細り，最後には一枚の羽のようになって上へ下へと漂っていました。

「さてこの頃のちょうどある日に，私は彼に，今私の全身像を撮ってくれるかどうか，と尋ねてみました。すると彼は，ちょうど虻のように小さな呻き声を出して，たまたまドアが開いて吹き込んだ風によって，天井の割れ目に入ってしまいました。こうして私は松明を上に掲げて彼を待っているのです。そのうちにやがて私は掠れてしまい，幽霊になり，壁に取り付いたままになりました。」

そこで，城の主人と一同はこの不思議な有り様を見ようと，地下の貯蔵庫へと急ぎ下りていきました。みんながそこへたどり着くと，城の主

人は勇ましく刀を抜いて，「死よ！」と叫びました，（しかし，誰に対して，何に向かって言ったのか，説明はありませんでした）。さて何人かが中に入り，多くの者は後ろに下がり，前の者を急かせて，元気を出せと言うのですが，そのことばほどには大して模範になりませんでした。しかし最後はとうとうみんなで中に入り，城の主人が最後に入りました。

みんなは壁の傍から大樽やその他のものを取り除けて，語るも恐ろしいくだんの幽霊が壁際にいるのを見つけました。

その恐ろしい姿を見ると，近頃には稀な，まるで聞いたこともない金切り声が上がりました。ある者は気絶し，他の者はビールをがぶ飲みして気絶するのをまぬがれました。しかし，恐怖で生きている心地はしませんでした。すると，その貴婦人は彼らに次のように語りました。

「ここに我あり，ここに我待つ，
　そのときがやってくるまで，
　この城の貴婦人で名も顔も
　我に似たる人
　（我が名は知らせじ，されど
　　頭文字を教えよう）
　その人を写真に納めて
　頭と足とを一緒に写して撮ったならば，
　我が顔は消えよう，
　二度と再びここでみんなを
　怯えさすことなかるべし。」

すると，マシュー・ディクスンが彼女に言った，「何ゆえにその松明を高く掲げるか。」それに答えて彼女の曰く，「ろうそくは光を放つ」と。しかし，誰にもその意味は不明であった。

この後，か細い声が天井から言った。

「オークランド城の地下貯蔵庫に

遠い，遠い，その昔
押し込められし —— 元気潑溂の若者あり ——
おお，おお，おお悲惨
彼女を全身写真に撮るは
我にはその力の無かりしに
テムポーレ[30]（だから，私は彼女に言う）
プラエテリト[31]！

（歌のあとのコーラスを，続ける者は誰もなかった，ラテン語が分からなかったためである。）

「彼女は無情 — おお，彼女は冷酷 —
遠い，遠い，その昔，
ここで私を飢え死にさせた — 薄い粥さえくれもせず —
ほんとだ，ほんとに，信じてくれ，
スコットランドから逃げ出せれば，
私の最後のボウビー[32]をやろう —
あれや，ほうい，公正な扱いこそ尊いもの，
私を，ほうら，放してくれぇ！」

そこで城の主人は刀を脇に置き（以来，あそこに置いたまま，かくも大いなる勇ましさを記念して）執事に命じ，すぐさまビールを取りに行かせ，ビールは彼の意のままに持ってこられ（いや，彼は浮かれて言うことに，彼の「意のまま，ベックのまま，と直喩で輪を作り」）彼はビールを空腹に流し込んだ。「何故にと，問うや？」彼は言う，「まことにベック[33]は涸れていては小川にあらず，じゃ。」

5．3．2．『スコットランド伝説』の遊び

5．3．2．1．多重構造への兆しをみせる『スコットランド伝説』

物語の舞台は司教の住いオークランド城である。その地下室，スコットランドと呼び習わしている一角に女性の幽霊が出る。下男マシュー・ディクスンがそれを目撃し，一部始終をみなに語っていく。

前置き部分の語り手である著者エドガー・カスウェリスは，そのまま本文の語りを続けていくが，下男マシュー・ディクスンを紹介すると，ディクスンが目撃した体験を一人称で語り始める。しかし話の前置きが終わると，著者のことばでディクスンとそれを聞いている周りのもののやりとりが会話文を挟んで語られていくが，やがて「目撃証言は続く」と書くと，ディクスンに語らせる。後半の「貴婦人の物語」は，幽霊である貴婦人の口から彼女が幽霊になった経緯を引用符で括って一人称で語らせる。内容は，ディクスンが前節で歌った歌に出てくるロレンゾがチメラを持っていて，それで貴婦人の写真を撮り損なうことになり，その結果，彼を地下室に押し込めて，貴婦人の方は彼が全身像の写真を撮ってくれるのを待っている。こうして彼女は待ちながら幽霊になった，という話である。話の途中に聞き手が問いを差し挟み，それに貴婦人は返事をする。差し挟んだ質問は丸括弧で括っている。このような書き方をしているのは，その聞き手が直接幽霊を目撃したディクスンのはずであるのだが，実際の問いの内容といい，聞き方といい，ディクスンではなく語り手のエドガー・カスウェリスであることを示しているのであろう。貴婦人が話し終えると，早速城の主人以下みんなは地下室へ駆け付ける，そこで囚われのロレンゾが食べる物も与えられずに羽のように軽くなって，虻のようなか細い声で歌う歌が聞こえる。城主はそこで悠然と，ビールを持って来させてこれを飲み干して言う冗談から，彼の名前が城主のベックであることを思い出させる，ということになっている。この短編は，エドガー・カスウェリスが書き留めた話で，その中では下男のマシュー・ディクスンが体験を物語る。彼の話に対して聞き手が——あるときは女中，ある時は城の主が，話に口を挟んでコメントを出し

たり，問いを発したりする。彼の話は幽霊に出会った話であり，その幽霊が物語る話の中に出てくる男が，ディクスンの話を聞いた人々に歌を歌って哀願するということが起きて物語は多重の層をなす。これは，現実世界の人々と会話をする幽霊という設定と合わせて，後に『シルヴィとブルーノ』の作品の構成に取り入れた手法で，キャロルとしてはその萌芽を見せているということができよう。

5．3．2．2．ことば遊び

マシュー・ディクスンは，館の主の言いつけで地下のスコットランドへ降りていくとそこで女の幽霊を見て気絶する。運び出されて主の居間で介抱されつつ様子を語る話の中で，女の幽霊が姿を出すと，どこからともなく「ゴーンレス，ゴーンレス」という囁き声が聞こえてくる。この幽霊の着ているガウン，即ちドレスについて，女性の服には無知な下男が，それはドレスとはちょっと言い難い，むしろなにかラッパー（包む物）にくるまっていた。下男はそう言っておいてから，いや，ラッパー（包む人）というよりも，包む奴（Wrap-Rascal）という方がぴったりだ，と遊び始める。

さて，そのときに傍に集まって話を聞いていた女中たちからは，ラップラスカルなんて聞かないわよ，と顰蹙を買う。すると下男は潔く「訂正を受け入れる」，“I stand corrected.”と言いながら，自分のことばのなかにあるスタンドに合わせて椅子から起き上がろうとするのだが，しっかりとスタンドできずに倒れてしまう，という一幕がある。

『スコットランド伝説』はベック司教（Bishop Bec）の時代のことである，と前置きに書かれている。実はオークランド城はエドワード１世の時代にアンソニー・ベック司教（Bishop Anthony Beck）が建てた，という史実がある。キャロルは案内されて城の歴史を聞いたところを，この『伝説』の中に盛り込んだのであろう。

物語の後半に入ってから，下男のマシュー・ディクスンは，幽霊が歌った詩，それはウィル・シェイクスピア先生が書きそうな詩で，これをみんなに聞かせるために，館の主の若き二人の姪にピアノの伴奏をしてもらい歌ってきかせる。ここに若き二人の姪として登場するのがロングリーの末の娘，キャロラインとロザマンドであった。聞いたこともない節で歌う幽霊の歌には，ロレンゾ(Lorenzo)という人物が出てくる。

このロレンゾは，訪ねてきてお茶の時間まで残っていた。しかも一言も発しなかった彼であるが，「パンはドライがよいのか」という問い掛けに対して，「バターを塗ってくれ」と，やっと口をきく。

そこは，

not a word he ut-tered,

….

Hee answered 'But-tered.'

utteredとbutteredと韻を踏み，それぞれの綴りを音節に分けて視覚の上でも形が類似していることを示している[34]。

「貴婦人の物語」に入ると，無口だったロレンゾが，実は芸術家で，人間がチメラ(Chimera)と称する驚異の器械を持っており，これは実に信じがたい道具で，時がひと打ちする間に，写真が一枚取れるのだという。ところが，いざやってみると幽霊の唯一の望みである全身像の撮影に，頭入れば足がなく，足が入ると頭のない写真ばかりとなって，足のない写真は「私自身の嘆き」(と語るのは幽霊)であり，頭なき写真は皆の笑いぐさとはなりにけりの結果に終わった。こうして，ロレンゾの話はいつの間にか写真家の腕前を笑う話になっている。

頭のない写真というのは，写真家キャロルが被写体として好んだ少女エクシー・キチンに向けて書いた手紙（1880年）にも，同じようなことを書いて挿絵を付けたものがある[35]。

キャロルの甥スチュアート・コリングウッドによる『ルイス・キャロ

ルの風景』の中では，『スコットランド伝説』にキャロル自身が描いた挿絵を見ることができる。それは，松明を掲げた若い貴婦人の横顔で，髪を結い上げて，腰を絞った，スカートのたっぷりとしたドレスを着て優雅な姿にみえる女性である[36]。

6．キャロルの日記から

キャロルがリポンを訪れていたのは，聖堂参事として父が在任した1852年から68年にかけて17年の間の，毎年1月1日に始まる13週間で，彼はその間の数日あるいは数週間をリポンにいる家族と過ごした。現存する日記に基づいてテクストをそのまま忠実に起しているエドワード・ウェイクリング編の『ルイス・キャロルの日記』は，既刊の第1巻から第5巻がちょうどこの時期をカバーしているので，日記によって彼がリポンに滞在した時期がおおよそわかる[37]。但し，残っている日記は1855年以降で，52年から54年の3年間については，不明である。

即ち，1855年1月(第1巻)，1856年1月(第2巻)，1857 年1月，1858年1月（第3巻）を参照できる。1859年から1862年の1月の記録は原本が紛失している。1861年1月2日の日記については，コリングウッドによる引用(90頁)からわかっている[38]。そしてウェイクリング編の日記によって，1863年と1864年の1月については第4巻で，1865年から1868年の間の1月の日記については第5巻で見ることができる。日記によって以下に，リポンにおけるキャロルの記録をみていくことにする。

1855年1月は1日から19日までリポンに滞在し，この間はバーカー婦人の所に泊まっていた。1月6日には，Began an ideal sketch for the Art-repository. Comic sketches should always be etched: colour only suits serious subjects. 1月10日には，Got my likeness photographed by Tooth, to send to Barclay. After three failures he produced a tolerably good likeness, which half the family pronounce the best

possible, and the other half the worst possible. 1月11日には，Began Keats' Life by Milne－wrote "the Carpet-knight" in the Art-Repository.この年の3月28日にキャロルは，復活祭の休暇でリポンへ戻って行く。I packed up in the afternoon, and left Oxford by the evening train－after travelling all night, I got to Ripon at about nine in the morning.しかし，父を残して家族の者は，ひとあし先に前日クロフトへ発っていた。キャロルは，そこで，ブースに写真を撮ってもらって後，クロフトへ向かい，夕方5時に到着した。

1856年1月1日をキャロルはクロフトで迎えた。1月2日，「これまでに一度もしたことがなかった」ジョン・チェイターと食事をした。思ったより楽しかった，と書いている。1月3日にクロフトからリポンへ行く。「午後1時に出て3時頃に到着した」という記述から，当時，クロフトとリポンの間は馬車で2時間ほどであったことがわかる。下僕がその時は一緒ではなかったために，家族が泊まっている参事館にキャロルも宿泊した。1月5日参事館の図書室にある本からチャールズ・マシューの『思い出の記』を読む。その中で，『ヘンリー8世』の中の司教役は一座の主要なコメディアンが演じるのがしきたりになっている，ということを知り，前年6月22日にロンドンのプリンセス座で観たときにコメディアンのメドーズが演じていたのを不思議に思ったことの謎が解けた。そのときは意外で非常に驚いたのだった。1月7日，ロングリーから15日に食事の招待を受けるが，ロンドンへ出る予定があり，断わった。そこで，ロングリーは3人の娘を連れて会いにくる。翌日8日，リポンのキャロルの元に，『トレイン』第1号が届く。キャロルは，「ありふれていて内容がディケンズの二番煎じばかりである，1年持つかどうか」という感想を記した。1月15日，8時58分の汽車でリポンからロンドンへ向かい，夜9時30分に到着。スケヴィントン叔父と食事をするのに間に合った。

1856年2月11日イェイツ氏に筆名の候補を送った。3月20日，グレイト・ノーザン鉄道でリポンへ。リポン大聖堂の首席司祭の権標捧持者ウィリアム・バーネット（c. 1788-1858）の家に泊まる。3月22日には，父と姉エリザベスと共に司教館へ行く。4月1日，家族と共にクロフトへ。

1857年1月1日はクロフトで迎え，3日に家族と一緒にリポンへ行く。ウィルフレッドとキャロルは再びバーネットの家に泊まり，スケフィントンは，大聖堂の寺男トマス・ウィルスンの所に泊まった。1月21日リポンからロンドンへ。23日夜11時にオクスフォードに帰着。4月21日にロンドンへ出て，24日にはオクスフォードに戻った。この年，イースターはリポンへ行かずにクライスト・チャーチで過ごした。7月4日クロフトへ。グレイト・ノーザン鉄道で夜8時に到着。8月12日にビショップ・オークランドへ。キャロルは此のときに，司教の住いであるオークランド城を見物して，『伝説』を書くという約束をしている。日帰りの訪問だった。翌日の日記によると，彼が出かけている間にオクスフォードのリドゥル夫人から手紙が届いていた。内容は，送った写真に対する礼状で，リドゥル夫人と娘たちは次の日にビショップ・オークランドへ行き，そこに泊まり，ウイットビーへ行く，ということが書いてあった。つまり，キャロルとリドゥル夫人たちとは，相前後してオークランド城を訪ねていたのである。

1858年1月1日クロフトからリポンへ。弟スケフィントンとキャロルは再びバーネットの家に泊まる。1月16日にリポンで『スコットランド伝説』を書き上げた。1月21日，リポンからロンドンへ。3月27日，8時30分の汽車でオクスフォードを発ち，リポンには夕方6時30分に到着。ユニコーンホテルに泊まる。4月6日夕方クロフトへ行く。12日ロンドンへ出る。

1859年から62年にかけての日記は紛失している。エドワード・ウェイクリングは，編纂した日記の第4巻の冒頭で，この時期の日記とキャロ

ルの動静について再構築を試みている[39]。その中からリポンに関係のある部分およびその時期にキャロルにとって関心が高かった事柄を紹介しょう[40]。

1859年，新年はいつもどうりリポンで過ごす。この年の復活祭の休暇にはワイト島にテニスンを訪ねた(4月8日，13日)。この時期から，キャロルは復活祭の休暇にリポンへ行くことをしなくなる。おそらく，彼の興味と関心はオクスフォードの生活，大学の仕事，それにロンドンで芝居や美術展を見て，画家や演劇界の人々に会い，次々と新しい刺激を受けることに夢中になってきた時期であったと思われる。クライスト・チャーチで，ロンドンで，初めての出会いをたくさん経験している。夏，おそらく8月にロングリーがいるビショップ・オークランドを訪ねたようだ，とウェイクリングは残っている写真の記録から推測する。日付けは不明だが，キャロルはカメラを持っていき，司教ロングリー，娘のキャロライン，ロザマンドの写真を撮って，またロザマンドの油絵の写真も撮った。10月10日に新年度が始まって一週間後に学部生となった皇太子がフリューインホールに入った。その個人指導教官の一人が友人のダックワスで，彼を通じてキャロルは皇太子の写真を撮影する機会を期待するが，実現はしなかった。その代わりに，翌年12月になって，皇太子の署名を手にしている。

1860年。ウェイクリングは日記の「再構」の中で，おそらく新年はリポンで迎えている，としている。記録のある年にならってそう推測することができる。復活祭の休みにはカメラを携えてクロフトに戻り，リッチモンドの大監督である父の肖像を撮る。この年は特にオクスフォード大学でリドゥルの提案により新築された博物館においてダーウィンの説をめぐるオクスフォードの司教ウィルバーフォースとトマス・ハックスレーの間の論争を聞いた。この機会にキャロルはウィルバーフォースとハックスレーの写真を撮る。彼が撮った写真のなかには，マイケル・フ

ァラデーの肖像写真もある。

ウェイクリングは「1860年の日記再構」のなかで，興味ある指摘をした。それは，キャロルがオクスフォードとケンブリッジの大学のメンバーで投稿する雑誌『カレッジ・ライム』に「海の挽歌」という詩を載せたとき（1860年10月）に，彼は，「クライスト・チャーチのルイス・キャロル」として出した，ということである。彼にとっては日頃からクライスト・チャーチは実名のドジスンと結びついた世界であり，キャロルの筆名と大学とを関連づけることはそれまでにも無かったし，その後もなかったと思われるのである[41]。

ウェイクリングの「日記再構」で1860年の終わりの部分には，次のような推測がある，“Dodgson returned to Croft for Christmas, and then moved with the family to Ripon just before the beginning of the new year.”[42]他の日記の記述から，また父親の任務の期間が１月１日から始まる３週間，という取り決めからみて，キャロルが年が明ける前にリポンにいた，ということは異例と思われる。この記述はプリンストンのパリッシュ・コレクションに残っているMSがリポンで書かれていることと，その日付けが12月31日と 1月１日になっているために推測できる，とウェイクリングは述べている[43]。

1861年。この年の１月１日から，書簡記録を付け始める。それはリポンで始まっているようだ。１月２日，大聖堂の参事のグレイ氏が訪れてきて，食事をし泊まっていく。コリングウッドによれば，このときキャロルはクライスト・チャーチにいるようにも読みとれる[44]が，ウェイクリングはキャロルが会ったグレイ氏はリポンの参事であることを明らかにしている[45]。この年の復活祭にキャロルはリポンには行かずに，ヘイスティングズへ行き，ジェイムズ・ハントという人について発音矯正の指導を受けた。

ホルマン・ハントの「神殿におけるキリスト」という絵を画家ハント

のスタジオで見てキャロルが作った「三日後」という詩は1861年7月に『テンプル・バー』という雑誌に載った。「テンプル・バー」は法曹界の雑誌だが,「神殿のキリスト」は“Christ in the Temple”である。偶然の洒落か。

12月14日，女王の夫君アルバート公がウィンザー城で没す，42才。この年のクリスマスにキャロルはキャサリン・シンクレアの『ホリディ・ハウス』を子どもたちの名前で作ったアクロスティック詩と共に，アリスたち三人に贈った。12月22日には，クライスト・チャーチ大聖堂で，キャロルは英国国教会の監督の資格をオクスフォードの司教サミュエル・ウィルバーフォースによって授けられた。

1862年の年頭はいつものようにリポンで過ごす。1月13日に，彼はクライスト・チャーチに戻って数学の論文を書いていた。1月には，テニスンに個人的に許可を得て妹たちが作った「イン・メモリアム」の索引3,000項目以上を編集して，ロンドンのエドワード・モクソンから出版した。4月19日，妹メアリへの手紙には，キャロルはワイト島へ行き，テニスンと息子のライオネル，ハラムに会ったことを書いている。また，女流写真家のマーガレット・キャメロンにも会っている。この年，キャロルは，トム・クォッドの7番階段3号室に部屋を移動した。5月1日には，ロンドンで国際博覧会が始まり，彼は6月21日に初めて見に行った。その後7月5日，7日，8日と数回訪れた。

1863年1月1日はウィットバーンへ行き，3日の夕方，リポンに行く。しかし，3日から何の記録もないまま，16日の日記には，なにも変わったことがないままクライスト・チャーチへ戻った[46]，とある。リポン滞在中に二度司教館で夕食をし，1回はグリーンウッド家で食事した，それ以外には何もなかった。この1863年あたりから，キャロルはリポンには行っているものの,滞在中に出かけて人と付き合うことが少なくなった。ロングリーは1年前の1862年にカンタベリ大司教として家族とともに南

へ移っている。

1864年は，1月1日に，クロフトから家族と共にリポンへ移動した。寒さが厳しい，と書いている。前年同様，リポンに来た日と去る日の記録があるだけで，1月14日に，オクスフォードへ発つ[47]。数学を少しやったことが書いてある。復活祭はリポンには行っていない。

1865年，新年をキャロルはウイットバーンで迎える。1月4日にウイットバーンからリポンへ。5日は家族と一緒に司教館での夜会へ行く。翌日再び，妹のメアリとルイーザを連れて，司教館で食事。家族的で楽しい夕べ，と書いている。17日に再び司教館で夕食。司教はロングリーの後任のロバート・ビッカーステスである。1月25日に，リポンからロンドンへ。翌日，マクミラン，それからテニエルと会う。復活祭の休みには，4月5日にロンドンに出て，翌日，息子の方のリッチモンドが北ウェールズのダンディドノウで描いたリドゥル3人姉妹の絵を見る。キャロルは，感想を次のように書いている。「イーナはやや硬くて，憂鬱そう。アリスはとても可愛らしい。だが，あまり自然には見えない。イーディスが一番ほんものに近い。」4月18日にキャロルは画家ミレーを訪ねて初めて彼の妻，ユーフィミア・ミレーに会った。それまでは，ミレーと子どもたちに会うだけで，妻を見かけたことはなかった。非常に感じのよい貴婦人らしい人と思うと書き，日記の最後でもう一度，「ミレー夫人には長い間会ってみたいと望んでいた，彼女に会ったからこれは記念になる日」，と書いている。この夏，7月29日にはロンドンからクロフトへ戻った。9月6日からリポンの司教館へ写真を撮りにいき，9日にクロフトへ戻る。

1866年1月1日，キャロルはクロフトからリポンへ行く。そして，16日にリポンからロンドンへ出る。この時のリポン滞在のことを，「リポンのソサエティの人々にはほとんど会わなかった。3回外で食事をしただけで，それもみんな司教館だった。」

1867年1月1日，クロフトからリポンへ。1月23日，リポンからロンドンへ。この日の日記には，前回同様に，「私のリポンの日々は変わり栄えのしないものだった。私はどこにも行かず，ただ司教館で食事があっただけだ」。

1868年1月1日，家族の一行とリポンへ。1月16日にロンドンを回って，17日の夕方オクスフォードに着く。1月16日の日記には，リポン滞在中に数学の論文と『アリス』の続編を数ページ書き足した，その間，司教館で一度食事をしたきりで，その他はどこにも食事に行かなかった，と書く。

キャロルのリポン滞在は，日記からみると以上のようである。

1868年6月21日に父ドジスンがクロフトで亡くなった。家族とキャロルがリポンで過ごしたのは，この年の1月が最後となった。そのとき彼は『アリス』の続編の一部を書いていたのだ[48]。

日記にはないが，この年（1868年）キャロルはリポンのクレセントに住むマーガレット・カニンガム（当時13才）に失くしたキッドの手袋の請求書を出した。コーエンの手紙集にはハッチからとして，マギーが「リポンの参事館に滞在していたキャロルのところに遊びにいったときに，間違えてか，あるいはわざとか，キャロルの手袋を持ち帰ってしまったので，それを知ったキャロルがおもしろ半分に手袋の請求書を出したもの」という引用をしている。日付けはなく，2月ではないか，という推測の疑問符がついている[49]。しかし日記で見たところからは，1868年のキャロルのリポン滞在は，1月1日から16日で，手紙はこの間に出したものではないかと思われる[50]。カニンガム一家が住んでいた家[51]は現在もリポンのクレセント9番地に残っている。同じクレセントの2番地には，キャロルがアリスの挿絵のモデルに想定して写真を手に入れたメアリ・ヒルトン・バドコックの住んでいた家[52]がある。

7．　リポン大聖堂

ヨークにある大聖堂がヨークミンスターと呼ばれているように，リポンの大聖堂は地元ではリポンミンスター (Ripon Minster) とも呼んでいる。アングロサクソン時代の地下聖堂が今に残る指折りの古い歴史の教会で，現在の地に伝道のための拠点ができたのは遠く655年のことであった。しかしこの聖堂が司教を迎えたのはトマス・ロングリーが初代である。合唱隊の席のある内陣の壁際についているミゼリコード[53]に刻まれた彫りもののなかには，キャロルの『不思議の国のアリス』その他の作品にヒントを与えたのかと思われるものが見つかる。グリフォンに追われて穴に逃げ込むうさぎ[54]や，笛を吹く豚[55]の彫刻など。珍しいのは，パイプオルガン奏者が聖歌隊を指揮するために足踏みの操作で使用できる木彫の右手で，現在もそのまま残っている。この右手の木彫はオルガン席が改築工事によって，木枠の囲み[56]の中に閉じ込められたために，オルガン奏者が，その「檻」の外側に取り付けの木製の右手を足踏みのバネで動かして指揮を取った。『不思議の国のアリス』のなかの「お茶会」の席には，「時を打擲する」と「拍子をとる」という両方の意味使いで，聞くものを戸惑わせる場面があるのも，この拍子をとる手と関連付けたいところだが，キャロルはこの手を見てはいなかったようだ[57]。

7）　オールド・ブーツ

リポンの町の中心をなすマーケット・プレイスの一隅にユニコーン・ホテルがある。スコットランドのジェイムズ６世がイングランドのジェイムズ１世となって王位に着くためにロンドンへ上る途中で立ち寄ったとも言われる古いホテルで，その歴史は下に略記する。キャロルは聖堂参事館に部屋が足りないときは，このホテルに泊まったことがある。ジェイムズ王に関わりのあったユニコーンホテルは，『鏡の国のアリス』のライオンとユニコーンの一騎討ちにその着想を提供したという説がある。

一方，キャロルがユニコーンホテルから着想を得たとするならば，これぞといえるもの，それがキャロルから少し前の18世紀後半に，このホテルで働いていたオールドブーツという綽名の変わった男である。彼は名前をトム・クラッドといい，宿の客のブーツやシューズを磨いていた。この男には，自分の鼻と顎で，一枚のコインを挟んで持つという変わった特技がある。キャロルのノンセンス詩『スナーク狩り』には，ヘンリー・ホリディが挿絵を描いているが，しかしその挿絵には描かれていない登場人物が一人ある。それがBootsである。ブーツが挿絵に出てこない理由が何かは不明である。もしやブーツの姿は，1793年3月1日付けC．ジョンスン発行の『不思議満載雑誌』に載った「ヨークシャはリポンのユニコーン・ホテルに働いていた名物奇人ブーツ[58]」を思い浮かべるとよいのかもしれない。

挿絵（図版12）は，1762年にトム・クラッド本人をモデルにして描いたものである。挿絵のなかに書込まれた解説によれば，「この実に変わった男は，ヨークシャはリポンの，とある旅館に長いこと住み込みで働いていた。生まれつきの，またその後に培った性癖によって，この男は自分の鼻と顎で，一枚のコインを挟んで持つ能力を身につけている。彼の仕事は，お客の用を足すことであり，シューズやブーツを磨くことであった。そのために，人はオールド・ブーツと呼ぶ習わしがあった。」

『不思議の国のアリス』の第10章『ロブスター・カドリール』のなかに，

Do you know why it's called Boots and Shoes?

It does the boots and shoes.

とあるのを，マーティン・ガードナーは*Annotaled Snark*の注[59]で，「ブーツというのは，ホテルや宿泊所で働く使用人，ブーツやシューズを磨くような下っ端の仕事をしている。」と解説する。

「ユニコーンホテル」の歴史[60]を見ると，中世も後半になって，宿屋に

は文字の読めないものにも分る看板をつけるように，ということになった。そこで，たいていの宿屋は教会が発行している『動物寓話』に出ている動物をもって看板とした。そのなかでも力強さと猛々しさを併せて持つユニコーンが選ばれたのは，もっともなことである。さらにユニコーンの角のカップでものを飲むと毒に当たらないという言い伝えがあったことも，宿屋の看板には向いていた。1379年の人頭税の報告書には，リポンのマーケットプレイスの周辺に3軒の醸造業者あり，という記載が見える。名称などは出ていないが，そのなかの一つで名前をトマス・リーズというものが，ユニコーンの経営者ではないか，とみられる。その後350年ほど経って，1626年7月22日にロンドンの俳優でエドワード・アレインというものが，ヨークシャーの土地建物を購入し，その取り引きの証書のなかで，「リポンのユニコーンの看板のあるマーガレット・ターナーの家にて」と書いて署名している。このマーガレット・ターナーは旧姓をマーガレット・アランスンといい，1604年にエドワード・ターナーと結婚した。したがって，判明しているもっとも古いユニコーンの所有者はターナー夫妻，ということになる。夫のエドワードが1624年に死んだのちにもマーガレットは23年間ユニコーンを経営した。しかも1625年から26年にかけては，黒死病が流行し，42年には清教徒革命が始まり，マーケットプレイスはその衝突の現場になった。マーガレットは1647年に死んだ。この年，チャールズ1世は捕縛されてリポンで2夜を過ごした。対するクロムウェルの方は翌年1648年8月13日と1651年8月18日にリポンに泊まっている。おそらく，宿泊先はユンコーンであった。マーガレットの息子はトマス・アランスンという。彼はユニコーンを遺贈されたが，家族の知人であったリチャード・ポーターに売却している。

1672年の炉床税報告書によると，ユニコーンには8つの炉床があった。リチャード・ポーターは1676年に死んで，同名の息子がユニコーンを継承した。その息子は3年後に死んで，リチャードの妹のエレン・ホーナ

ーが跡を継いだ。彼女の死後は，ユニコーンは彼女の３人の妹が所有するところとなり，経営者は３人の手に分かれた。1697年にリポンを訪れたシリア・フィーンズは，「宿屋のなかには，よそ者には非常に高い値段をふっかける所がある」，と書いている。

1704から７年にかけて，フランシス・カウリングがユニコーンの３分の２の所有権を手に入れた。1734年の彼の死後，甥のカスバートが相続し，10年後の1744年に，残り３分の１の所有権も手に入れてユニコーンは再度，一人の所有者のもとに経営されることになった。1745年，カスバート・カウリングはユニコーンをウィリアム・ハッドンと妻のサラに売却した。以後，ハッドン一族が18世紀の間はユニコーンを所有した。この間にハッドンは，太い木材造りのユニコーンを，ジョージ王朝風のレンガ造りに替えた。この時期に，マーケットプレイスの建物が一つだけの例外（ウェイクマンの家）を除いて現在みるレンガ造りになった。変わり者のオールド・ブーツが登場するのは，この時期のことである。キャロルが『スナーク狩り』を構想するきっかけを摑んだのは，結核を患った従弟ウィリアム・ウィルコックスをチェスナッツで看病していた1874年７月のことで，リポンから６年後の1874年。初版を出版したのは２年をおいて1876年であった。その間，リポンで見聞した事柄はキャロルのなかで熟成し，『鏡の国のアリス』に，『ファクタズマゴリア』に，そして『スナーク狩り』に取り込まれていったのである。

おわりに

ルイス・キャロルを北国の出身と看做すとき，従来はアン・クラーク・アモーの著書においてそうしていたように，生地のダーズベリ，およびクロフトを中心に紹介されてきた。確かに，リポンはキャロルが20才になってから初めて訪れた土地であるから，出生地や出身地とみるわけにはいかないが，その後は毎年１月に家族と一緒に休暇を過ごすことが17

年続いた。その土地でキャロルが見聞したことが，作品にも出ている。2000年夏には英国のルイス・キャロル協会が夏の大会開催地にリポンを選び，地元の研究家モーリス・テイラーの協力を得てキャロルゆかりの土地を見聞する機会を作った。これをきっかけとして，それまで散らばっていた断片的な事柄が筆者のなかで初めてリポンを軸に纏まり，リポンの時期のキャロルの小品を読み，またリポンをテーマとして日記を読んだ。挿絵のために協力していただいた方々に感謝します。

Acknowledgements

The writer wishes to thank A. P. Watt Ltd on behalf of the Trustees of the C L Dodgson Estate for the pemission to include quotations from Lewis Carroll's Diaries vol. 1−5, Anne Clark Amor for her permission of citations and translation of her writings; Mark Richard for his permission of reproducing the illustrations of the leaflets prepared by him for the Ripon Summer Outing, 2000. Edward Wakeling's Reconstruction of the missing Journals in Lewis Carroll's Diaries volume 4 was very useful to find out the periods when Lewis Carroll was in Ripon and the events during his stays. The photographs of the misericords were supplied by Christina Bjork. Maurice Taylor's Lewis Carroll's Ripon and his enthusiastic talk and guide through Ripon with his wife Dorothy were stimurating.

Bibliography

Lewis Carroll, Child of the North., Anne Clark Amor, 1995.

Testimonial To The REV. C. Dodgson, M. A. The Introduction by Anne Clark Amor, The Lewis Carroll Society, 2000.

Ritual Worship. A Sermon. 1852, The Rev. Charles Dodgson, M. A.

A Letter to The Lord Bishop of Ripon. On Some Objections. By The Rev. Charles Dodgson, M. A. 1852.

Phantasmagoria, Lewis Carroll, 1869.

The Lewis Carroll's Picture Book, Stuart Dodgson Collingwood, 1899.

A Topographical Dictionary of England Vol. III, by Samuel Lewis, S. Lewis and Co., 1848. Reprinted by Hon-No-Tomosha, 1995.

Rhyme Words in Lewis Carroll's Poems by Tokuji Shimogasa in *Lewis Carroll Studies* No.1, 1999.

Lewis Carroll's Diaries vol. I - vol. V, Edward Wakeling ed., The Lewis Carroll Society.

The Life and Letters of Lewis Carroll, Stuart Dodgson Collingwood, 1898.

The Letters of Lewis Carroll vol. 1, Morton Cohen ed.

A Selection from the Letters of Lewis Carroll to His Child-Friends, Hatch, 1933.

Annotated Snark, Martin Gardner, Penguin 1973.

Ripon Cathedral, A Short History of the Organs. Robert Marsh, The Dean and Chapter Ripon Cathedral, 1994.

Lewis Carroll's Ripon, Maurice Taylor, 1998.

Ripon Cathedral, A Pitkin Cathedral Guide, 1996.

Ripon Cathedral, A Pitkin Pictorials Ltd. An earlier version.

The History of The Unicorn Hotel supplied by Mitsuo Nishimura.

参考文献

1 *Lewis Carroll, Child of the North.,* Anne Clark Amor, 1995.キャロルはクロフト牧師館に住む自分たちきょうだいを指して'The Children of the North'と呼んでいる（「悲しみの歌 — 2」）。

2 The bank of a river.

3 図1。

4 図2。

5 *Testimonial To The REV. C. Dodgson, M. A.,* The Introduction by Anne Clark Amor, The Lewis Carroll Society, 2000.

6 With Anne Clark Anor's permission The Introduction was translated into Japanese.

7 *Ritual Worship. A Sermon* Preached at the Consecration of the Church of St. Thomas, in Leeds on the Feast of the Purification of St. Mary, 1852.

8 *"The Lord had respect unto Abel and to his offering: but unto Cain, and to his offering, He had not respect."*

9 英国国教会内の一傾向に対する18世紀以降の俗称で，聖職の権威を余り重視しない福音主義的な傾向があるグループ。

10 *A Letter to the Lord Bioshop of Ripon*一冊を長男で当時クライスト・チャーチの学部生であったルイス・キャロルに与え，現在，それはハーバード大学に保存されている。

11 冊子の冒頭の注記のなかでa misunderstanding of my sentimentsということが了解された，と書いている。

12 クロフトの牧師，リポン司教の試問司祭，修士C.ドジスン牧師へ，司教より叙階を受けた185人の聖職者が捧げる功労顕彰の記念として。

13 1883年に『ファンタズマゴリア』をアーサー・フロストの挿絵入りで出版した。フロストの挿絵の「騎士」は石炭入れを冠っているところが，『鏡の国のアリス』でトゥイードゥル・ディーとダムの兄弟が壊れたガラガラをめぐる戦いに備えた身支度を思い起させる。

14 図3。

15 図4。

16 図5。The layout is prepared by Mark Richard for the Ripon meeting, summer 2000, and is reproduced here with his permission.

17 8 February, 1856, Lewis Carroll's Diaries, vol. II.

18 図6。*Phantasmagoria*の初版には古風な書体で載せた，1869年，p. 66.

19 英語のCarpet Knightは，実戦を経験したことがない兵士を指す。

20 The day went in sight-seeing in the house and grounds; the weather delicious. I think we all enjoyed it.

21 原題はLewis Carroll's Picture Bookである。絵本ではなく，これより前に出版した『ルイス・キャロルの生涯と手紙』を補い，彼の人物像を伝える。

22 *A Topographical Dictionary of England* Vol. III, by Samuel Lewis, S. Lewis and Co., 1848. Reprinted by Hon-No-Tomosha, 1995.

23 The town, which is in the centre of the parish, is pleasantly situated on a considerable eminence, near the confluence of the rivers Gaunless and Wear,... (*A Topographical Dictionary of England,* Vol. III.)

24 In the prologue to *The Legend of Scotland* Edgar Cuthwellis states that it was in the days of Bishop Bec.

25 The palace, originally erected in the reign of Edward I. by Bishop Anthony Beck, and subsequently enlarged... *A Topographical Dictionary of England Vol III.*

26 「緑の鵞鳥」と訳したが，green gooseは，「鵞鳥の雛」，「まぬけ」の意味（O. E. D.）。4ケ月までの鵞鳥の雛で詰め物をせずに料理する（研究社，英和辞典）。

27 ここで，“I stand corrected”と言って，椅子から立ち上がるディクスンは，異なる意味のstandを一つに理解した。

28 ゴーンレス川（The Gaunless）から，「ガウンレス」の語を作っているためガウンとした。英語のガウンは翻訳するとドレス，衣裳に相当する。

29 「大急ぎでことをする」のrushと「光」lightとを，葦の芯で灯を点すRush-lightにこじつけているので，足と葦に訳してみた。

30 Tempore: the spur of the moment　一瞬の間，束の間

31 Praeterito. Praeteritus: past, gone by.　一瞬の写真撮影の時は，もはや過ぎてしまったのだ！

32 Bawbeeスコットランドの古い貨幣。もと英国の半ペンス３枚の価値。

33 ‘surely a Bec ys no longer a Bec...’　この城の主人はベック司教と，前書きにある。

34 Cf. *Rhyme Words in Lewis Carroll's Poems* by Tokuji Shimogasa in *Lewis Carroll Studies* No.1, 1999.

35 The Letters of Lewis Carroll vol. I, p. 370.

36 図７。

37 *Lewis Carroll's Diaries* vol. I-vol. V, Edward Wakeling ed., The Lewis Carroll Society, 50 Lauderdale Mansions, Lauderdale Road, London, W9 1NE, UK.

38 キャロルがこのとき，いつものようにリポンにいたことがウェイクリング編の日記Vol. 4の45頁から分かる。コリングウッドは，クライスト・チャーチで友人を招いた例として，この箇所を引用しているようだが，１月２日に訪ねてきたグレイという人物は，リポンの聖堂参事ウィリアム・グレイであった。

39 *A reconstruction of the missing Journals, for 18 April 1858 to 8 May 1862.* Edward Wakeling, *Lewis Carroll's Diaries* vol. IV, pp.

10-64

40 Lewis Carroll's stays in Ripon cited from *A Reconstruction of the missing Journals* with Edward Wakeling's permission.

41 Edward Wakeling, Diaries vol. IV, page 34.

42 This statement appears at the end of the reconstruction of Dodgson's Journal for 1860 (p. 44). For two reasons it was irregular for him to arrive at Ripon before New Year: 1) The surviving entries of his Journals about Ripon tell that his Ripon visit began 1 January or later; 2) his father's duty as Residential Canon was from 1 January for 3 weeks. Generally the family seemed to have arrived with or after Canon Dodgson in Ripon.

43 Wakeling found surviving manuscripts dated 31 December 1860 and 1 January 1861, both written in Ripon, in Parrish Collection, Princeton.

44 *The Life and Letters of Lewis Carroll,* p. 90.

45 *Lewis Carroll's Diaries* Vol. 4, p. 45. "The Canon in question was William Gray, etc."

46 Carroll went to Ripon from Whitburn 3 Jan., 1863. His diary entry 16 Jan. reads, "After uneventful stay at Ripon (during which... two evenings at the Palace, and one at the Greenwoods) I left for Ch. Ch." In 1862 Longley left the North for Canterbury as Archbishop in 1862 with his family. Carroll's growing interests were in Oxford and London.

47 In 1864 his stay in Ripon was uneventful like the year before. His diary entries in Ripon are: "Went over, along with the rest of the family, from Croft to Ripon. Cold intense." for 1 Janurary, and the next one is of 14 Janurary, "Left for Oxford. I have done a

little work at Theory of Equations and Trilinear Co-ordinates during the vacation." He did not visit Ripon during Easter Holidays.

48 On the evening of 21 June, 1868, his father Charles Dodgson passed away in Croft. The regular visits to Ripon in January no longer took place. The diary entry of 1 Jan. says, "...The party left for Ripon." and of 16 Jan., "Left for London en route for Oxford. ... I have also added a few pages to the 2nd volume of *Alice.*".

49 *The Letters of Lewis Carroll* vol. 1, Morton Cohen ed., p. 114,

50 According to Evelyn Hatch the date of invoice is guesses as February, and if it was during Carroll's stay in Ripon it would drop between 1 and 16 Janurary.

51 図8。

52 図9。

53 内陣にいる聖職者たちは着席せず,跪くか立ったままで礼拝をした。病気か老齢の弱者のために壁に折り畳みになる細い腰をもたせかけるもの。The misericord carvings were carved c. 1490 by Ripon craftsmen (from *Ripon Cathedral,* Pitkin Pictorial).

54 図10。

55 図11。

56 オルガンを囲む枠はサー・ギルバート・スコットがデザインし，樫材でできている。

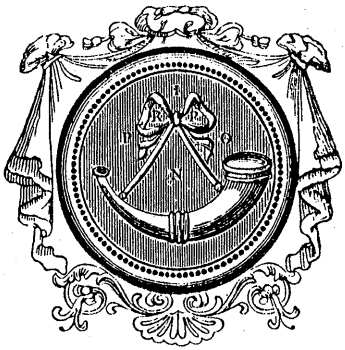
57 オルガン・ケースと呼ぶ樫の囲みは，1878年に製作されたT. C.ルイス・オルガンのためのものである。したがって，キャロルが見なれているリポンのオルガンは，1878年にランディロ教区教会に移されて，現在リポンにはない。

58 図12。The illustration was reproduced with the permission of Mark Richards. Boots was the sole character without any illustration in *The Hunting of the Snark.* In Carroll's mind this picture of Tom Crudd as Old Boots at Unicorn Hotel in Yorkshire could be the right illustration of Boots.

59 *Annotated Snark,* by Martin Gardner, Penguin 1973, p. 47.

60 The History of The Unicorn Hotel was supplied by Mitsuo Nishimura.

図 1



Seal and Arms.

図 2

図 3

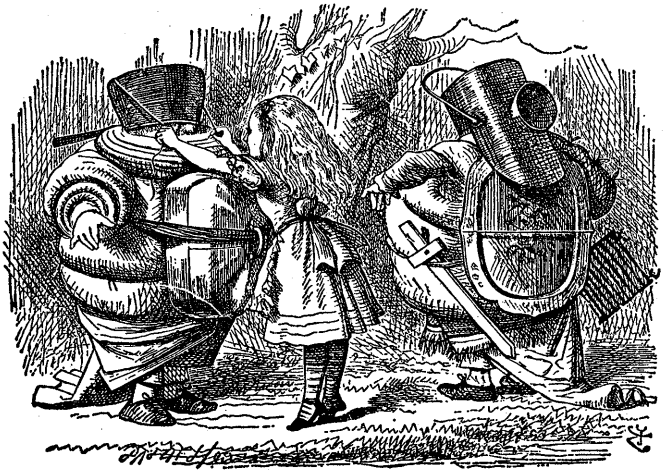
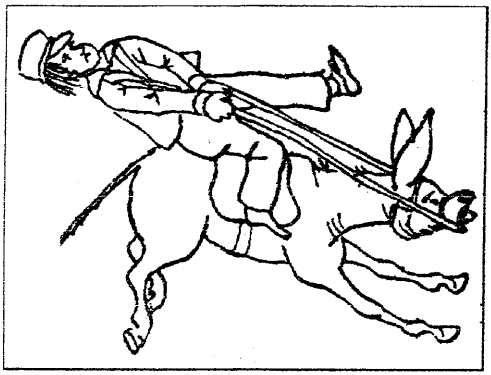


図 4



Mr Dodgson's Knights

1. In " Lays of Sorrow 2" - Croft on Tees;
2. The Carpet Knight - Ripon;
3 The White Knight - Oxford
4. "I saw an aged, aged man a-sitting on a gate" - Croft and Oxford.

図 5

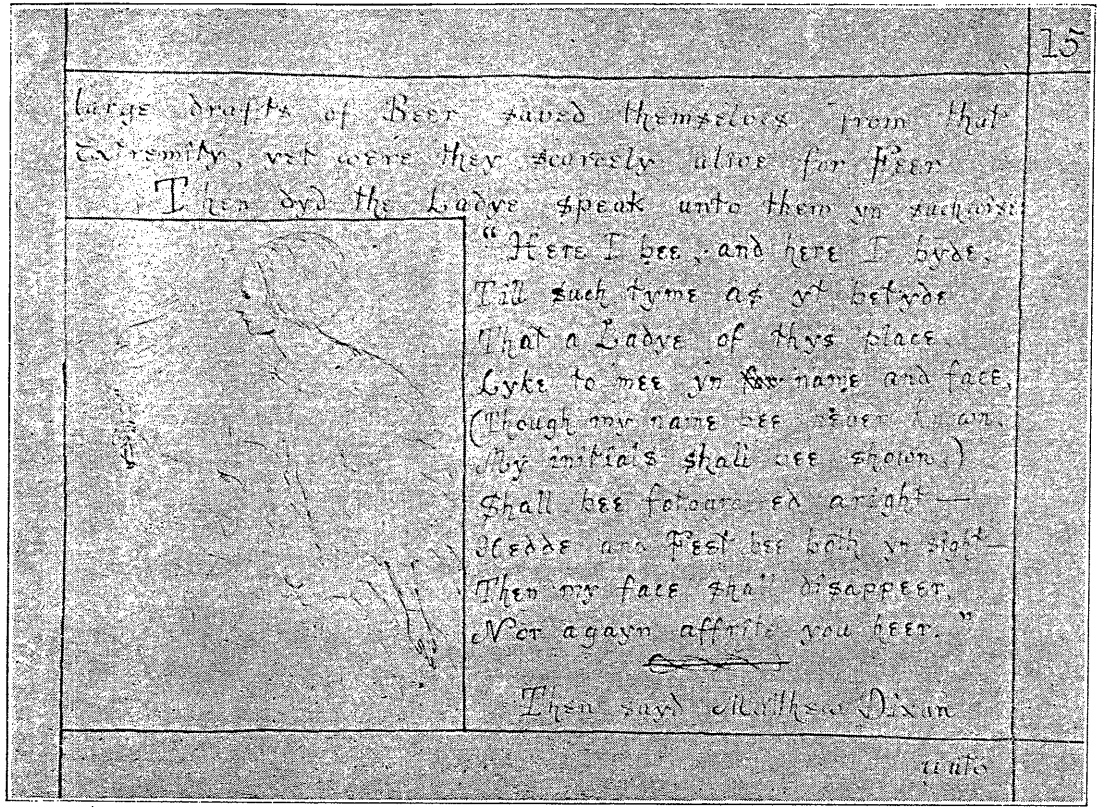
Ye Carpette Knyghte.

I habe a horse—a ryghte good horse—
  Ae doe I enbie those
Who scoure ye plaine yn headie course,
  Tyll soddaine on theire nose
They lyghte wyth unexpected force—
  Yt ys—a horse of clothes.

I habe a saddel—"Say'st thou soe?
  Wyth styrruppes, Knyghte, to boote?"
I sayde not that—I answere "Aoe"—
  Yt lacketh such, I woot—
It ys a mutton-saddel, loe!
  Parte of ye fleecie brute.

I habe a bytte—a ryghte good bytte—
  As schall bee seene yn tyme.
Ye jawe of horse yt wyll not fytte;
  Yts use ys more sublyme.
Fayre Syr, how deemest thou of yt?
  Yt ys—thys bytte of rhyme.

図6



15

large drafts of Beer saved themselves from that Extremity, yet were they scarcely alive for Feer

Then dyd the Ladye speak unto them yn suchwise:

"Here I bee, and here I byde,
Till such tyme as yt betyde
That a Ladye of thys place
Lyke to mee yn ~~her~~ name and face,
(Though my name see suer I am,
My initials shall see shown)
Shall bee foreare ev'r aright —
Hedde and Feet bee both yn sight —
Then my face sha' disappeer,
Nor agayn affrite you feer."

Then sayd Matthew Dixon

unto

A PAGE FROM THE ORIGINAL MS. OF "SCOTLAND."

図 7

図 8

図 9

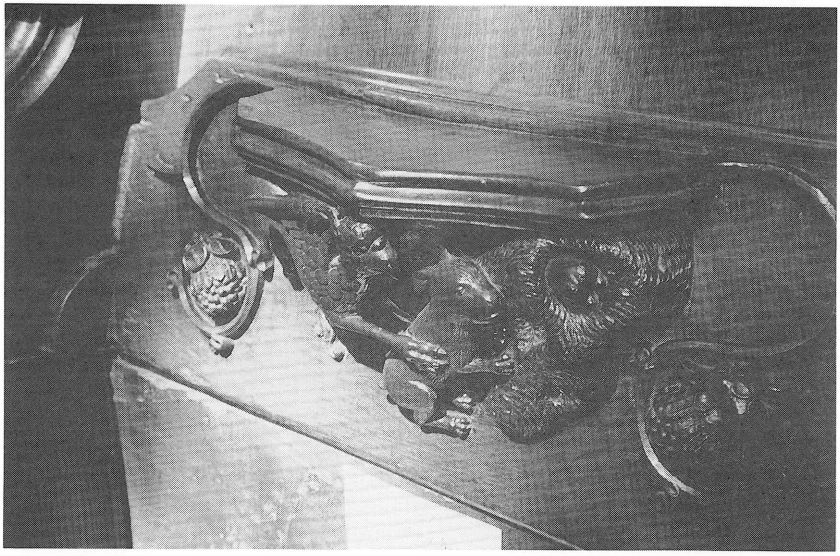


図10

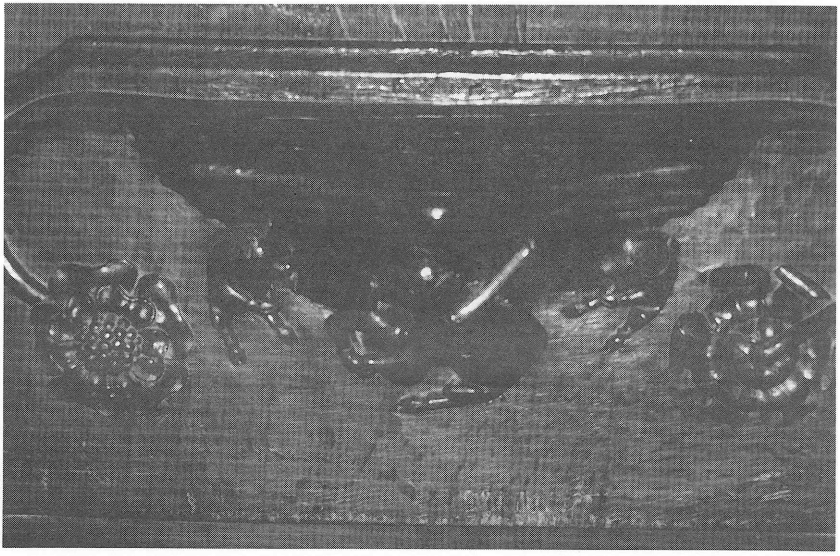


図11

WONDERFUL MAGAZINE.
This Extraordinary Man lived long at an Inn at Ripon in Yorkshire. By nature & habit he acquired the power of holding a piece of Money between his Nose & Chin
His chief employment was waiting on the Customers &c. From the circumstance of his cleaning their Shoes & Boots he went by the Name of Old Boots.
Drawn from the Life by Tho.s Grin.
J. Stronge Sculp.
OLD BOOTS of RIPPON in YORKSHIRE.
Published by C. Johnson March 1.st 1793.